農民の知的柔軟性及び關心構造測定の試み

內山政照

農業普及事業が農民の如何なる社會層に如何なる樣相を以て波及しているか、そのメハニズム如何を知ることは、農業普及事業を行おうとする際、最も重要なデータであることは云う迄もない。從來部分的には、特に普及の條件に就でかゝる試みが行われてきたが（註）、普及の或る特定の一線をとつて、包括的な視角から、この問題をとりあげることはあまり行われなかつた。

（註）例えば最近では近藤康男、〝日本農業經濟論〟「技術と經濟」の章。川田信一郎「農業技術の實態」—稻作の品種構成に現われた一場面（農業技術）の三昭和二二年四月號）。

私は幸い最近或る著名な一般向農業雜誌による讀者調査の結果を見る機會を得たので（次頁參照）、調査票は種々の缺陷を含んだ不完全なものであつたけれどもとにかく集計をしてみた所、興味あるデータが得られたのでこゝに發表することにする。但しケイスが少數であり、記入も不揃である上、統計的操作が未完成であるが、之は後日修正し度いと思つている。

二

此の調査は昭和二十二年一月此の農業雜誌の大阪本社に於ける定期購讀者に就て行われたもので、總數「一二九」例、しかもその分布は第一表に示す如く主として關西であり、且つ職業に於ては農業者以外のものが相當數見られる（第二表）。（全購讀者

第一表

縣別	人數	縣別	人數
北海道	一	三重	八
福島	二	滋賀	二
東京	一	京都	一
福井	五	奈良	一
岐阜	三	鳥取	三
愛知	三	岡山	二

番號

讀者調査表

性別	男 ・ 女	年齢	歳	職業	(經營反別)	氏名	自作 戸主 小作 非戸主
お讀みになつて難かしいですか	難かしい　程度を下げたらよい　其の他 判る　このまゝでよい 全然判らぬ　程度をあげたらよい						
今迄の連載物の内でどれがよいと思われましたか							
今迄の記事中よいと思われた記事があればかいて下さい							
惡いと思われた記事があればかいて下さい							
どの樣な記事がもつとあればよいと思われますか	A 實用指導 B 農政、經營、經濟 C 學術研究 D 文化厚生				E 娯樂教養 F 報道、解說 其の他(意見があればかいて下さい)		
圖、表、寫眞などは少いですか							
横組みはいかがですか	よろしい、よみにくい、よみにくいが慣れゝばよいと思う。其他(意見があればかいて下さい)						
價格は安いですか	安い　高い　これでよい　其の他						
他の雜誌とくらべてよい點							
同上惡い點							
其の他、意見、希望							

廣島	一八	佐賀	一
山口	二	長崎	三
德島	一六	大分	三
香川	八	兵庫	一
愛媛	八	不明	八
高知	五	計	一二九
福岡	五		

第二表

職業	人數	職業	人數
農業	九一	俸給生活者	一二
教員	一二	其他	二
學生	六	計	一二七
商工業	四		

中の農業者の割合は遺憾乍ら知ることは出來ない)。以下並列的に集計の數字を示すが、集計に當つては記載もれの項は除外した。

(1) 年齡について(第三表)

一般に豫想せられているよりも壯年層にウェイトのかゝつていることが注目される。此の數字を農業者の票のみによつて求め農村の人口構成と對比すると更に明瞭になるし、又他種の例えば都會の綜合雜誌などと比較することが出來たら一層の特徴を明らかにするであろう。

第三表

一六歳以下		四一—五〇	二五人
一七—二〇		五一—六〇	九
二一—三〇	四五人	六〇歳以上	五
三一—四〇	八		
三三	三三		

(2) 經營面積別(第四表、第一圖及第二圖)

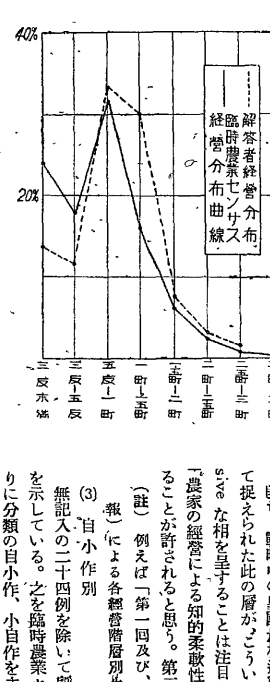
解答者は實數の五反—一町、一町—一町五反が壓倒的に多く兩者で總數の六三%餘を占めるが、之を更に昨年八月に行われた臨時農業センサスによる全國農家經營の分布と對比してみると、一町—一町五反の經營面積をもつ農家の解答率が非常に高い

第四表

經營面積	實數	%	昭和二二年八月臨時センサスによる全國農家%
〇—〇・二町未滿	一五	一三・六	二四・五
〇・三—〇・五町	一三	一一・八	一七・九
〇・五— 一町	三七	三三・六	三一・八
一— 一・五町	三三	三〇・〇	一六・〇
一・五— 二町	八	七・三	六・一
二—二・五町	三	二・八	三・三
二・五— 三町	二	一・八	〇・九

ことがはつきりする（第一圖參照）。センサスの數字が全府縣集計

第一圖



が考えられる。

即ち、戰時中の皇國農村運動に於て生産力の高い中核農家として捉えられた此の層が、こういう點でも極めて特徴的な progressive な相を呈することは注目に値すると思う（註）。この幅を假に「農家の經營による知的柔軟性 Intellectual flexibility」と名付けることが許されると思う。第二圖はそれを示したものである。

（註）例えば「第一回及び、第二回調査員だより」「農林統計月報」による各經營階層別生産力のカーブと比較され度い。

(3) 自小作別

無記入の二十四例を除いて割合を出すと第五表の如く著しい差を示している。之を臨時農業センサスのデータと對比するに、假りに分類の自小作、小自作を夫々自作、小作に入れても著しい偏向のあることが判る（自小作、小自作を全部小作に算えれば尚著しいことは勿論である）。

この偏向の幅はプラス・マイナス二九・五%である。

第五表

	實數	%	昭和二二、八臨時農業センサスによる%
自作	九一	八六	五六・五（自作＋自小作）
小作	一四	一四	四三・五（小自作＋小作）
計	一〇五	一〇〇	一〇〇・〇

（註）票には自作、小作の二分類のみであつたので記入が自小作或いは地主となつている場合は夫々自作、小作に編入した。

第二圖　經營別による知的柔軟性曲線

であり、この解答者は主として全國平均より經營面積のせまい關西以西の農家であることを考えるとき、此の幅は一層廣まること

その原環のまゝのデータは第六表に示した。

第六表

	自作	自小作	小作
地主	八九	四	一〇
無記入	二	無記入	二四

（註）無記入二四例を除く

前記の經營による知的柔軟性曲線と此の所有による知的柔軟性曲線とを對比するとき、前者の幅はプラス・マイナス一〇％餘であるに對して、後者の幅の著しく大きいことが判る。統計學的分析を一層嚴密にしてファクターを除去してゆかなければ、これ丈では意味が少いと思うが、一應知的柔軟性に關しては經營より所有關係の方が強い相關をもつことが言えるのではなかろうか。若しこれが云えるとすれば、農村普及事業（農村文化として一般化しても其の限りよい）に對する土地問題の重要性が浮び出てくると思うが、これ等の點に就ては更に檢討を要する。

(4) 關心構造及關心差に就て（第七表）

調査票には「どのような記事がもつとあればよいと思われますか」という問になつている。即ち是に對する解答は或意味では前述の知的柔軟性の内容を規定するものなのである。（註一二）

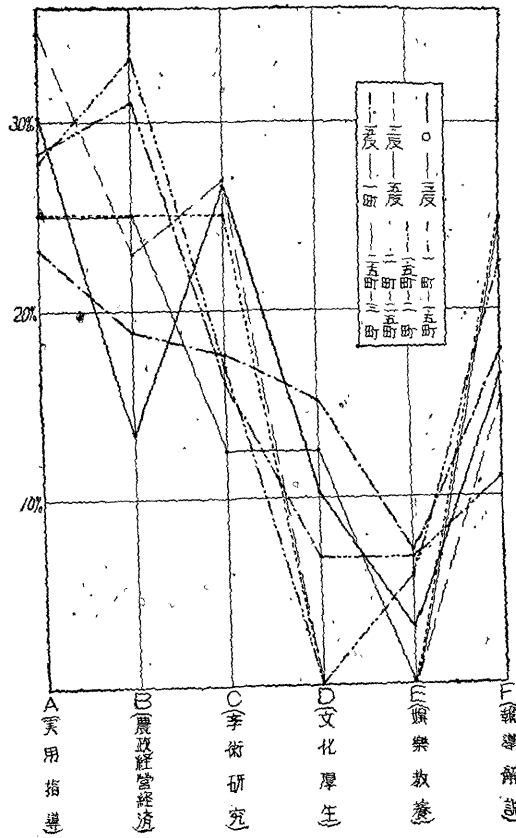
第七表

		自作地主	自小作	小作
		實數	實數	實數
		%	%	%
〇・三―〇・五町	A	一〇・六	一二・〇	六・三
〇・五―一町	B	三・二五	六・九	二・二
一―一・五町	C	二六・三四	一七・六	一八・二
一・五―二町	D	一六・〇三	一〇・二	九・一一
二―二・五町	E	一七・六	一〇・二	四・九
二・五―三町	F	二六・九七	一四・四	二・二
〇―〇・三町未滿		一・一	一・一	一・一
		六・七六	七・〇八	五・四四

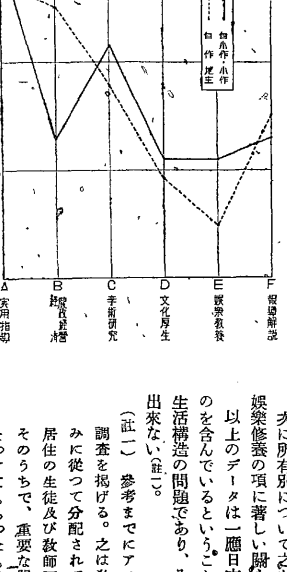
（註一）別項にある「今迄の運載物のうちでどれがよいと思われましたか」という問に對する解答も之と照應すべきものであろうが、いまは集計手續が面倒なので便宜上これとの關係は省略した。

（註二）カテゴリーの分け方が、根據が少いように思うが、之に就ては、例えば放送局等多數の希望投書の集つた機會に凡ゆる投書の分類により探究さるべきであろう。私が試みた調査

第三圖　經營面積別關心差曲線



第四圖　所有別關心曲線差



表及圖の示す如く全般に見て實用指導や經濟解説、農政經營經濟、學術研究などの關心が多く、之に對して文化厚生、娯樂教養への關心が著しく薄いことが注目される。更に之を經營別に見てゆくと第三圖に見られる如く一町―二町の層が特に農政、經營、經濟に對して特徴的關心を示していること、而もこの經營階層は先にあげた經營階層別知的柔軟性の最も高い層にほゞ一致することを注目すべきである。又三反未滿の經營農家が最低の關心を此項に示していることも當然であろうが注目に値する。

（註）前註にのべたように此のA、B、C　F　のカテゴリーを適當に考え、各階層別の曲線について各カテゴリー間の關心の差を考える操作が可能になれば、その社會層の關心構造（Constitution of Concerns）が把握出來、從つて各層間の關心構造差の一般的問題が解けると思う。

次に所有別について之を見ると（第四圖）農政經營經濟の項と娯樂修養の項に著しい關心差が見られる。

以上のデータは一應日本農民のエトスとして特徴付けられるものを含んでいるということは出來るが、之は更に云えば各階層の生活構造の問題であり、その詳細なデータの裏付けなしには斷論出來ない（註一）。

（註一）　參考までにアメリカに於てテイラー教授が行つた次の調査を掲げる。之は教授が農業雜誌の紙面が讀者の關心の重みに從つて分配されているかどうかを調査するために、農村居住の生徒及び教師百餘名に次のような十三項目を示して、そのうちで、重要な關心をもつものに、重みに從つて、順序をつけてもらつたものである。結果は次の通り。

(1)教育及學校、(2)家庭及家、(3)生産技術、(4)取引、(5)（取引以外の）協同組合、(6)健康及衞生、(7)教會及宗教、(8)運搬及交通、(9)厚生及娯樂、(10)勞働問題、(11)公民權及政治、(12)農業機械、(13)小說及自然觀察（Carl, C. Taylor: Rural Sociology. pp. 261-263. N. Y. 1926, R. H. Holmes; Rural

Sociology. The Family-Farm Institution. p. 311. N. Y. 1932)。

分類も異り、殊に調査對象に於て、此場合には生徒及教師という特殊な職業群であるので、吾々の場合と直ちに比較することは困難であるが、これ等比較によつて夫々の國の農村人が雜誌に何を期待するか、進んではそれぞれの關心構造を解く一つの鍵となるであろう。

三

以上で調査結果の報告は一應打ち切つて、是等の問題を扱うについて若干の吟味とプランとを記し度い。

(1) こゝに集められた調査票の對象者が農業雜誌の定期購讀者であり、次には返信の勞を敢ていとわなかつた人達であることを考えるとき、この二つの意味に於て、又その限りに於て各母集團に對してのIntellectual Flexibility を云うことは許されると思う。

(2) こゝに測定せられたものは或る一つの特定内容と販賣條件をもつ雜誌に關するものであること。從つて是だけで或は此の結果を直ちに農民全體の問題と對比せしめた方法は嚴密なものでないこと。この點更に吟味を要する重點である。

(3) (2)を避ける爲めには調査雜誌を種別を多くして增やすことが考えられる。又他の方法として、特定のコンミュニティに屬する各農家の戸別調査、或は讀賣會、文化會等のグループ調査を行うことに依つて夫々の技術水準、文化水準、生活水準等を適當なメルクマールに從つて測定し、之によつて更に一般的な柔軟性の數字を得ることが出來るであろうし、又此の調査によつて農村に於ける雜誌購讀者層、或は投書層の全農家中に於ける係數を得れば、特定の雜誌の讀者調査のみに依つても一般の知的柔軟性の測定も可能となる。

(4) 地域的には、かゝる方法を各地方の刊行物について實施することにより、その地方内の知的柔軟性の測定が可能であり、之はその地方に於ける普及指標を與えるであろう。又全國的規模に於て觀察するときは各地方の文化度とも云わるべきものが知られる筈である。この測定の試みを、長野縣農業會發行「信濃路」(二三年三月號)で試みたので後日發表したい。

(5) 一方普及當事者に於ては、定期的にかゝる調査を試みることにより農民の知的志向のトレンドを把握することが出來、それに基いた普及方法手段の科學的組織化が可能になるのである(例えば讀者調査に基き編集方針の客觀的指標を得ることが出來る)。

(6) 更に此の方法を普及諸手段の凡ゆる方面に對して適用することが出來れば、各手段に就て夫々の條件の下に於ける夫々の特徴を知ることが出來るし、一般には有效化した影響(例えばそれに基ずいて實際に行われた改良、改善等)に對して各手段の效果、更に進んではそのコストの計算を行うことが出來るであろう。これはアメリカに於て既に試みられている。(C. B. Smith & M. C. Wilson; The Agricultural Extension System of the United States. 1930. N. Y.)

(7) 更に注意すべきは普及諸手段そのものゝ性格に就てであつて、このことは例えば明治十四年に發刊され現在まで引續き發行されている「農業」(初めは「大日本農會報告」)後「大日本農會報」更に「農業」と改題、大日本農會發行、の編集内容について見ると、大體明治二十年前後を境に、特に日清日露兩戰爭を轉機に、内容も論者も著しく農民性を失い、それ以前に盛んに姿を見せていた各地の所謂老農が姿を消して官僚學者の勢力がこれに代るということが見られる。其後の展開はこの傾向が一層進んで現在見られる如きものになつた。一方そのアンチテーゼとして篤農的雜誌―例えば九州の「農友」、其他―が農民のものとして生れ出ていること、これはかゝる點についての反省を要求する。

他の諸手段例えば、農談會―講習所―講習會（文化會）の系譜、或は共濟會―藏作の系譜、等に關してもほゞ同樣な事實を指摘することが出來る。是等が一體何を意味するかは、明治以來の吾が農村の社會經濟的發展過程の中に究明されねばならない。

(8) なお普及のメハニズム及その條件の分析に關する一般的資料として、時間の點からと經濟の點からの把握が必要であるが、之に就ては放送文化研究所編、日本放送協會發行の〝國民生活時間調査〟(註)と、農林省の〝農家經濟調査〟或は内閣統計局の〝家計費調査〟とが唯一の資料であろう。後者に就てはよく知られているが、前者に就て餘り知られていないので註に於て簡單に紹介する。

(註) 四季別、職業別、年齢別、地域別に、一日中の使用時間を「睡眠、食事、身の廻り、入浴、休息、農作、蚕蠶、蚕畜、商賣、手仕事、家事、針仕事、勉强、教養、趣味、娯樂、運動、交際、公務」の一九項目に分けて計算しているもので、貴重な資料であると云える（全二十四册、昭和一七年一一月日本放送協會發行）。

四

以上簡單に問題を並列してきたけれども導入普及の諸過程に於ける經濟的、社會的諸問題に就て理論を展開することが次の仕事として殘っている。之が出來て初めて是等のデータが生きてくるであろうことは勿論である。

なお參考のために私の試みた某誌の讀者調査を掲げる。（次頁參照）これは此の票の諸項目を直接に全國的センサスの數字と對比せられることを意圖したものであり、是に依つてこの報告に不可能であつたより細かい操作が可能になると思う。

これでファクターとして考えているものは、(A)經營の諸條件（所有別、經營別、集約度）＝Situation (B)本人の態度（年齢、學歴、經歴、經營主か否か　）＝Haltung であり、(C)(5)(6)並に(7)(10)に依つて知的柔軟性及び關心構造を捉えて、C＝f(A,B) として相關關係を求めようと意圖するものである。御示教を期待する。（一九三八、二、二〇）（研究員）